

今週のメニュー

[トピックス](#)

欧州発ユニークな塩ビ製品 - ポータブル遮音壁 -

[随想](#)

古代ヤマトの遠景（55） - 【倭国の朝鮮半島との関り（3）】 -

信越化学工業（株） 木下 清隆

[編集後記](#)

トピックス

欧州発ユニークな塩ビ製品 - ポータブル遮音壁 -

遮音壁あるいは防音壁というと高速道路、鉄道などをイメージするのではないのでしょうか？ビル建設などの工事現場では騒音対策がとられています。その材質は、鋼鉄、コンクリート、石材、木材など頑丈なものだったり、目的によってはプラスチック、ロックウール、防音シートなど軽量なものも使われます。

欧州から届いた2010年冬号のPVC Today マガジンに、塩ビターポリンを使った遮音壁が紹介されています。製品は重さがおよそ40kgの塩ビターポリンの袋のようなもので、小さく折りたたんで使用現場に運んでいけるということです。設置現場で、コンプレッサーで空気を入れて膨らませると、厚さ15cm、縦・横約3×4mの平たい立方体になり、エアーマットレスのお化けのようなものになります。使う場面はというと建築現場はもちろんのこと、野外コンサート会場やスポーツイベント会場ということです。この発想は、単純な構造で、軟らかく、安価で、持ち運びが簡単な遮音壁材を求めて、シュツットガルト大学（ドイツ）と欧州のフラウンホーファー研究機構がタッグを組んで開発されたものと報じられています。

遮音壁というと、その遮音効果はどうなっているのか気になるところですが、この空気の入ったシェル構造物は約20デシベルの減音効果があるということです。減音の効果は、音源からの距離や騒音源の種類によっても異なりますが、ちなみに、騒音は10デシベル下がると体感的には半減して聞こえるといわれます。なお、この遮音壁材は、空気室の形、配置、数を変えるなどカスタマイズ可能であるばかりか、外面の生地やシェル内の空気圧を調整することによって騒音吸収をコントロールできることから様々な種類の騒音に対応可能と述べられています。



建築現場での施工例

(PVC Today マガジンより)

そして、この超軽量遮音壁材は、ドイツ発の革新的なアイデア商品を世界に発信するために大統領も後援している Landmarks in the Land of Ideas 賞を受賞したとのことです。詳しくは、以下の web をご覧下さい。(了)

[PVC Today \(2010 年冬号\)](#)

[SATTLER \(Noise barriers\)](#)

随想

古代ヤマトの遠景 (55) - 【倭国の朝鮮半島との関り (3)】 -

信越化学工業(株) 木下 清隆

< 広開土王碑 > (1)

次のキーワードは『広開土王碑』である。この碑は五世紀初頭の四一四年に、鴨緑江の中流域付近に建てられたもので、高句麗広開土王の顕彰碑とされているものである。石碑は高さ六メートルにも及ぶ巨大なもので、四角柱の四面に碑文、約一八〇〇文字が刻み込まれている。広開土王の名は碑文に「国岡上広開土境平安好太王」とあるところから来ているようである。

この碑文に倭のことが記されており、当時の倭国に対する史料がほとんど無いところから、極めて重要な碑文とされている。明治時代にその存在が我国に知られるようになり、石碑の拓本を入手した日本軍の参謀本部によってこの碑文の研究は進められた。戦後になり、碑文の解釈の仕方、或いは碑文の改ざん説などが登場したことで、大きな論争が巻き起こった。石碑そのものは現在ですでに千六百年程が経過しており、当然風化が進み、全く読めない欠字、判読不明な文字、微かに読める文字等が、その碑文に混在している。従って、この碑文をどのように読み解くかについては、多くの見解、解釈が存在するのは当然のこととなる。

碑文全体は大部なものであるが、その中に幾つか倭に関する記述があり、その部分及び関連する箇所を抜き出し、分かりやすい文にすると以下ようになる。

- A 百残(百済の蔑称)と新羅は古くからわが高句麗の属民であって、もともと朝貢していた。ところが、倭が辛卯年(三九一)に海を渡って来たり、百残を破り更に新羅を討ち両国を臣民とした。
- B そこで永楽六年(三九六)王は自ら大軍を率いて百残を討伐した。そして五十八城を攻め取った。
- C 百残の王は追い詰められ、男女の奴隷一千人と上質の布千匹を差し出し、広開土王の前に跪いて、これより以後、永く奴客となることを誓った。
- D 永楽九年(三九九)百残は誓いに違ひ、倭と和通した。そこで広開土王は平壤まで巡幸南下した。
- E そのとき新羅王は使を遣わし、広開土王に、「倭人が新羅の国境に満ちみちて、城池を破壊し、高句麗の民である我々を、倭の民としています。新羅王は、太王に帰服し、その命を待とうとしています」と言上させた。



広開土王碑の場所

- F 永楽十年（四〇〇）広開土王は歩兵騎兵五万を新羅救援に派遣した。男居城から新羅城に至るとそこは倭兵で満ちていた。この中に高句麗軍が至ると倭賊は退いた。高句麗軍は倭の背後より急迫し、任那加羅の従拔城に至った。城はすぐ高句麗軍に帰服した。
- G 永楽十四年（四〇四）倭は無法にも帯方界に侵入し、... 石城に至った。..... 倭寇は潰敗し、惨殺されたものは無数であった。

以上が広開土王碑文に記されている倭国関係の概要であるが、良く考えてみると幾つかの疑問点が出てくる。この碑文によると倭国は辛卯年（三九一）永楽九年（三九九）及び永楽十四年（四〇四）の三回、半島に派兵したように理解される。果たして三回も派兵したのだろうか、が第一の疑問である。第二の疑問は一体どの程度の兵を派遣したのかである。この倭国による半島への派兵は倭国にとって国家的大事業だったはずである。自分の国が攻められたわけでもないのに、半島に国家的野心だけで出兵したとはとても考えられない、とするのが本考での基本的な認識である。

【辛卯年問題】

先ず辛卯年（三九一）問題である。かつて高句麗の属民であった百済と新羅が、辛卯年に倭が渡海してきて両国を破り、それぞれ臣民にしたというものであるが、このような史実が有り得たのかが基本的な疑問である。大国高句麗の南下政策でこれから戦闘の巷と化すであろう半島南部に、いかなる理由で倭国は兵を動かすのかである。領土的野心は全くなかったとの前提に立てば、倭国が半島で係わるのは金官国だけで十分であり、百済と新羅を臣民とするために、半島に侵攻する理由など地政学的には全く考えられないことである。

もし、倭国が百済と新羅を武力で制圧したとすると、その兵力がどの程度必要となるかを考えてみると参考になる。恐らく五万程度の兵は必要はずである。最低でも彼らが保有する兵力と同程度の兵力が無いかぎり、武力制圧など考えられないからである。しかも、陸続きの隣国に派兵するのはわけが違う。五万人もの兵を運ぶだけで、恐らく二千艘程度の船が必要となったはずである。兵士の調達・武器の調達・食料の調達等どれ一つ取っても大変なことである。もし、倭国に国家的野心があったとしても、両国の武力制圧は物理的に不可能であったと考えるのが自然であろう。

ずっと後世になるが、鎌倉時代、元が文永の役・弘安の役で投入した兵力は、それぞれ三万数千人と十四万人といわれている。天候の影響で元の日本侵攻の野望は潰えた。これを百済・新羅侵攻に邁進していたとする当時の倭国に当てはめて考えれば分かり易い。五万もの兵が天候の影響も受けずに、半島に上陸できるとする保証は一つも無い。では残った兵で両国を制圧できたかであるが、倭国排除のためには百済・新羅連合に更に高句麗が参加してくることも十分に考えられ、そうなれば倭国による半島制圧など、夢のまた夢となる。このように見てくると、辛卯年の記事は明らかに事実と異なることが記述されており、辛卯年の派兵は無かったと云えることになる。

以上のような辛卯年問題に対する解釈は、原文「倭以辛卯年来渡海破百残 ... 」において倭国が海を渡ったのは辛卯の年であったとの旧来の説を前提として、そのような派兵はなかったと結論した。ところがその後、この原文を「倭は以って辛卯の年よりこのかた ... 」との読み方が提唱され、広く受け入れられるようになっていく。それで、この読み方に従うとどうなるかであるが、倭国が渡海し、新羅を破ったのは辛卯年ではなくても良

いことになる。要するに永樂九年（三九九）の倭国の派兵時のときでも良いことになる。

高句麗は、辛卯年条で百済と新羅が倭国の臣民となったから、特に百済を討ったと碑に述べているが、これは屁理屈である。彼らは百済攻撃の因果関係を無視している。原因系は、辛卯年（三九一）よりこのかた、碑が建てられた四十四年までの間がその対象となっているからである。「来のかた」という読みには、これほどの解釈を可能にするインパクトがあるということである。

この辛卯年問題の結論は、旧來說であろうと新來の説であろうと、倭国の辛卯年の渡海はなかったと言うことである。

なお、原文の渡海破の内、「海」字は不明とする専門家が多いが、補うとすれば「海」しかないとするのが、大方の意見なのでここでは始から「海」を補って検討を進めた。

（つづく）

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(54\) - 【倭国の朝鮮半島との関り\(2\)】 -](#)
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

編集後記

震災後に何かが変わったと思う人が多いのではないかと感じています。メディアを通して伝わる情報だけではなく、身の回りの生活感からも自分が何処に居て、どこへ行くのか。また、今回ほど、人の縁、絆の大切さを思ったこともありません。いろいろと厭なものを見ることが多いと嘆くよりも、何か遠くに明るさを見てとれるのです。バブルのはじけた時代と違い、若い世代から何かが変わり始めているように思います。離れていても、一緒に前を向いて歩くこと、その人を思いやること、小さくても幸せを分かち合えること、そんな社会をみんなで作りたいですね。（円行）

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601 FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp> E-MAIL info@vec.gr.jp